

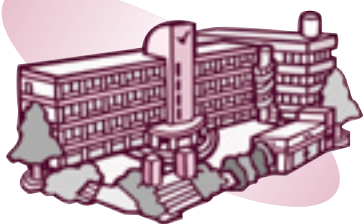
不登校をやっつけろ!

親子奮戦記

第1回

名和隆子
(塾講師)

まさかウチの子が不登校に?



え? まさか不登校?

子どもが小学校3年生の夏休みのことでした。「人生を情熱的に生き直したい」という、およそ理解不能な理由で、夫が家を出ていきました。

私は家計の足しにはなく、生活のために働かなくてはならず、学期の途中でしたが、公立中学校の講師の職を得ました。

そして私がフルタイムでの仕事を始めてすぐ、子どもが学校に行かなくなったのです。明確な理由はありません。なんとなくだるい、起きられなかった、あちこち痛かった……などというばかり。毎朝7時半には出勤しなければ仕事に合わない私に対し、子どもは小学校まで5分。ひとりで8時過ぎまで家にいるということも、登校のきっかけを失わせたようでした。

「ちゃんと学校に行くのよ!」と、後ろ髪をひかれる思いで家を出る私を、ベッドのうえで丸くなりながら見送る子ども。本当に登校したのか? と心配でたまらず、後で学校に電話してみると、「いえ、洋平君は来てません」。……自宅に電話しても、コール音が鳴り続けるばかりです。「いったいどうなってるの!?!」

でも、私には次の授業があります。自分の子どもの心配はいったん忘れなければいけません。こんな気持ちで教壇に立つなんて……。

心のクリニックに通いはじめる

3年生の3学期になると、「不登校」はさらに進みました。朝から登校する日はほとんどなくなり、遅刻して途中からという日が週のうち2〜3日。まるで行かない日が2〜3日というペースです。いままで「離婚」も「不登校」もテレビの中、本の中できくと聞いていましたが、私の身に現実降りかかってきたのです。

洋平は小さい頃から、同世代の友だちと話すより、おとなを相手にする方が楽というような子どもでしたが、保育園でも小学校でも友だちがたくさんいましたし、ましていじめなどありません。学校に行けば、他のお子さんよりも元気に過ごしているくらいなのです。

しかし、目を追うごとに、洋平の不登校は確実になり、私は中学校の講師を辞める決心をしました。そして月に2回、ある小児科の先生が開いている「子どもの心のクリニック」に通いはじめたのです。

(つづく)